

ちが考えたほど活用されるにはおそすぎたのであった。

なお、本書の寄贈者は、江馬益也という人で、同氏は、本書と同時に、貴重な蘭医関係の洋書27点も本学に寄贈されており、それらの中に、江戸中期以後、名蘭医として活躍した美濃大垣藩藩医

江馬蘭斎の手沢本が含まれていること、及び明治24年になくなった江馬家の後裔で名医でもあった江馬活堂の本名が元益であること、の2点から、この「和蘭字彙」が本学に寄贈された明治33年当時の江馬家の当主であったと考えられる。

本学の蔵書400万冊をこえる

本学の蔵書が12月2日で400万冊をこえました。

明治30(1897)年6月、京都帝国大学の創立時和漢書:37,746冊、洋書:5,315冊、計:43,061冊の蔵書で発足し、昭和8(1933)年に100万冊、昭和33(1958)年に200万冊、昭和47(1972)年に300万冊を超え、今回、400万冊をこえたものです。

ちなみに、わが国では東京大学が501万冊、国立国会図書館が363万冊(いずれも昭和56年3月31日現在)(注)国立国会図書館は他に地図・レコード・マイクロ資料で約35万点所蔵している。)となっており、本学は東京大学に次ぐ第2の蔵書を有することとなります。

本学の蔵書の中には、内外に誇りうる貴重図書として、「近衛文庫」、「維新特別資料文庫」、「富士川文庫」、「中院文庫」、「谷村文庫」、「旭江文庫」、「清家文庫」等17の特殊文庫をはじめ、稀覯書も多くみうけられます。なかでも後世に永く保存すべき図書として、文化財保護法に基づき重要文化財に指定されたものが、37種168冊を有していることは特筆に値します。

このように質・量ともに優れた本学の蔵書は、本学の学術研究・教育・学習のみならず、全国の研究者にとっても大変有益な資料として、広く利用されることが期待されます。

— 資料紹介 —

大 山 文 庫

本文庫に収められている書物は、本学名誉教授故大山定一先生の所蔵されていた洋書(1231部、1451冊)を、くま子夫人をはじめ御遺族の御好意により、文学部が譲り受けたものである。

大山定一先生は、明治37年香川県琴平町にお生まれになり、昭和3年京都帝国大学文学部を卒業後、第三高等学校講師、京都帝国大学文学部講師、法政大学予科講師、京都ドイツ文化研究所講師などを歴任されたのち、昭和21年京都大学文学部助教授、昭和25年同教授となられ、以後、昭和43年3月に停年退官されるまで、文学部ドイツ語学ドイツ文学講座の主任教授として多大の功績をのこされた。また昭和41年から2年間、文学部長としての重責をはたされた。本学を御退官後も、関西学院大学文学部教授として活躍されていたが、昭和49年7月1日に御逝去になった。

大山先生のお仕事は、周知のごとく Johann

Wolfgang Goethe および Rainer Maria Rilke の研究や翻訳を中心として、ひろく近代から現代にいたるドイツ文学全般にわたっているが、本文庫に収められた御蔵書からも、大山先生の文学的関心の多面性と造詣の深さをうかがうことが出来る。したがってその内容は Goethe や Rilke 関係の文献をはじめとして、Gotthold Ephraim Lessing や Heinrich Heine に関する従来本学に欠けていた文献や、現在では入手しがたい19世紀末から今世紀前半にかけて刊行された貴重な研究資料が広範囲にわたって収集されている。

文学部図書室では昨秋この文庫の整理を終了、文学科書庫に備付けて研究者の利用に供しているが、7月には冊子目録の編集も完成して「大山文庫目録」を刊行することが出来た。ここにあわせて報告させていただく次第である。

(文学部・村橋ルチア)